

**学会
報告****第36回日本臨床皮膚科医学会
北海道支部研修講演会**

日本臨床皮膚科医学会北海道支部学術担当 小泉 洋子

第36回日本臨床皮膚科医学会北海道支部研修講演会が、平成15年4月26日ロイトン札幌で開催された。根本 治副支部長の司会により、「皮膚科領域のレーザー治療」と題して近畿大学医学部皮膚科教授手塚 正先生が講演された。手塚先生はレーザー医学会理事を務められ、この領域の先駆けであり、多くの実績を上げ続けられている重鎮である。ご講演では、日常診療における炭酸ガスレーザーおよびIPL (Intense Pulsed Light) 治療について多くの症例をお示しになり、その適応、有効性を示された。要旨を以下に述べる。

IPLは2000年にBitterが、しわ、肌荒れ、色素沈着、毛細血管拡張症、毛穴をしめるのに有効な手段として報告した。その後、中年の色索性疾患、とくに顔面における老人斑、脂漏性角化症、くすみ(径2~3mmの極淡褐色斑)、雀卵斑、遅発性両側性太田母斑に対して、レーザー治療に並んで用いられている。近畿大学において老人斑と雀卵斑にルミナスを500~1200nm、2.8~6 mes、20J/cm、2週ごとに3~5回照射した。小さい病変に効果がよく、老人斑では40%に有効であった。患者の満足度は65%であった。副作用は痂皮形成が1例に見られた他、skin type 3では色素沈着をきたす例があった。IPLのメカニズムを組織学的検索から明らかにした。照射直後には基底細胞層に空胞変性を認め、肥満細胞は脱顆粒をきたしている。30分後に表皮真皮結合部に裂隙を形成する。24時間後には水疱が形成され、48時間後に細胞浸潤をみる。7日後には痂皮をつけている。このことから、IPLの直接効果は基底細胞の熱変性、間接効果として肥満細胞の脱顆粒による基底細胞のターンオーバーの亢進、メラニン形成の抑制が考えられた。

Qスイッチルビーレーザーについて次に述べた。メラニンはどのような波長でも吸収するからどのレーザーでも応用は可能である。熱緩和時間が20msec以上だと周囲の組織がダメージを受ける。またメラニン以外のターゲットに吸収される波長も望ましくない。1992~2002年に太田母斑515名を治療した。80%が有効以上の効果があった。治療回数は10回くらいであったが、青みの強い例では15回照射した。照射後色が薄くなるのには時間がかかり効果は3カ月で最大となるといわれている。1回のみ治療し、その後数年後に受診、良くなっている例を示し、少数回の治療での有効性を示唆した。肝斑は一時はいいが前より色が濃くなる。ポイツイエーガー症候群、雀卵斑、Acropigmentation reticularis Kitamuraに有効である。

炭酸ガスレーザーのターゲットは水である。到達深度は30 μ mである。血管は凝集し出血しない、細かい作業ができるのが特長である。Pulsed typeとContinuous typeがある。M&M社のChopped Pulse炭酸ガスレーザーで治療した。色素性母斑、汗管腫、Hydrocystoma、血管拡張性肉芽腫、アミロイド苔癬、巨大面皰などが適応である。副作用は色素沈着であり、skin type 4の人におきやすい。対策としては、精製甘草エキスグリチルリチン、スキンホワイトニングクリーム、オールトランスレチノイン酸、ビタミンC誘導体のイオントホレーシスを行う。

講演後の質問では、巖先生からスライドで示された上口唇から人中にかけての大きな色素性母斑の治療の実際について質問があり、一期にすると崩れるので2週に1回ずつ少し行い2年くらいかけて治療した。川嶋先生から、1.汗管腫は癬痕に

なりやすいといわれているがどのように行うか。丘疹の真ん中を炭酸ガスレーザーで少しずつ治療すると小さくなる。1月毎に治療する。2.太田母斑に対し1回Qスイッチレーザー照射施行後4、5年後によくなっていた症例では、どのくらいで効果がでたのか。じわじわとよくなった。レーザー治療の間隔は3、4月よりも1年1回でもよいのではないかと思う。根本先生から1.炭酸ガスレーザーを当てるとしゅっと縮むというのがDefocusか。Focusで小さな穴をあけるとしゅっと縮まり

シワもよくなっていく。2.炭酸ガスレーザーはざ瘡後の癬痕には効果があるか。経験はないがいかもかもしれない。3.IPL後に肌にはりが出てくることあるのはどうしてか。機序は不明だが何回かするとはりが出てくる。4.炭酸ガスレーザーを眼の近くに当てる時にはどのように行うか。保護眼鏡、生食ガーゼを当てて施行する。質問は実際の方法に関したものが多く、レーザー治療が皮膚科での適応が広がってきたことが示された。会員に非常に益するすばらしい講演であった。

お知らせ

“Floor Seminar”開催のご案内

札幌医科大学医学部「Floor Seminar」を開催いたします。
札幌医大の若い研究者が行っている最先端の研究を分かりやすく解説します。多くの先生のご来聴をお待ちしています。

講演日	演者	講演タイトル
7月14日	加藤 和則(分子医学)	リンパ球機能分子を標的とした免疫制御～臨床研究を目指して～
8月11日	相馬 仁(第1生化学)	リン脂質・Ca ²⁺ 結合蛋白質アネキシンの生理、病態活性
9月8日	佐々木泰史(がん研究所分子生物学)	p53転写制御因子ファミリーの個性
10月6日	坂本 淳(薬理学)	NAD依存性ヒストン脱アセチル化酵素SIR2の分子解析
11月10日	千葉 英樹(第2病理学)	コンディショナルシステムで探る生体バリアの形成と制御

12月以降も毎月第2月曜日に開催する予定です。

問い合わせ先：〒060-8556 札幌市中央区南1条西17丁目

札幌医科大学附属がん研究所分子病理病態学部門 三高俊広

電話：011-611-2111 内線2390 E-mail：tmitaka@sapmed.ac.jp